

九州と文學

春日, 政治
九州帝國大學法文學部國文學研究室教授

<https://doi.org/10.15017/10586>

出版情報 : 九大國文學. 2, pp.101-107, 1931-10-05. 九大國文學研究會
バージョン :
権利関係 :

九州と文學

春日政治

肥後の國學者中島廣足は、其の著「かしの下枝」に「西の國のうた」と題して、眞淵が古今集打聽に、

御國は西より開けつれば、西の國國の歌は都ぶりに
異ならず、東の國は晚く從服奉りて、人の心あらび
たれば歌の詞も異様なるをもて、萬葉集に東歌とて
別にあげたる也云々。

といふ東廬の説をかりて、眞淵自身もさる理に覺えると
言つたことを引き、萬葉集に見える豊前娘子大宅女や對
馬娘子玉槻さては豊前豊後白水郎の歌を擧げて、

右の歌どもいといとみやびにて言葉づかひ都人のに
かはる事なし。東歌のさばかり詞だみたるに、西の
方は對馬までもかくみやびたりしは、東廬の説の如

くにて、神武天皇の西より國はじめたまひし故なる
べし。(中略)又太宰府には常に都の官人多く下ら
れたれば、それになれて、自ら詞遣もよかりしにや。

今の京人西國を詞いやしといふれど、そは古へを
知らぬ也。西國には今も古言の多く遺れる、其古言
やがて古の都人のなれば、西國詞ぞ中々にいにしへ
の雅言には近かるべき。

と述べてある。この論の内には、帝國の起源の九州に在
ること、從つて言語も九州が古いこと、而して郷土人が
會て立派な文學をもつたこと等を強調してあつて、郷土
に對する一種の誇負を以て氣概を上げたものである。

我が國の文獻は奈良朝に於て、初めて表れるのであつ
て、かの古事記・日本書記・風土記等の史籍・地誌を魁

として、次いで純文學たる萬葉集等がそれである。先づ史籍たる記紀について我が九州を考へて見たい。記紀に於ける神代史の語る大半は我が九州を舞臺としてゐるのであつて、國土生成・橿原御祓・天孫降臨・笠沙崎皇居海幸山幸・高千穂宮さては神武東征まで皆九州に於てであつて、高天原といふ想像世界さへ我が九州の天上にあるかの感がある。神代の話をはじめ古代の歴史は口碑によつて傳つたものであるが、記紀の成立は各地方に有する説話をよせ集めての結果であつて、この神話傳説は無

論皇室を中心として形づくられた。而して其の主なるものは九州系の神話であつて、それに出雲系の説話が織込まれてゐると見るのが今日の多くの學者の見方である。かうした意味に於て、我が文學の發生は九州人の持つてゐた神話傳説を中心としてゐると言はなくてはならな

い。

次は地方誌たる風土記であるが、風土記は初め和銅六年の詔によつて出來たものである。現存のものは無論其の際出來たものばかりではないが、多くは散逸して、比較

的完全に近く遺つてゐる古い風土記は常陸・出雲・播磨・肥前・豊後の五つである。肥前・豊後の兩風土記は平安朝のものといふ人もあるが、靈龜以後でやはり奈良朝の内のもとするのが妥當であらう。とにかくこの風土記、即ち日本最古の典籍が、比較的完全に九州に二つ残つてゐることは、九州として誇るべきことであつて、九州を文學的に色づけてくれる一つの點である。

次に萬葉集であるが、萬葉集には已述の廣足の説のやうに九州歌といふものが儼然或地步を占めてゐることである。この事はよく言はれることであるから、餘り多くを談るを要せぬが、今より一千二百年（西曆八世紀）前頃に我が九州が地方的に立派な文學を有してゐたことは誇としてよい。集中我が九州で出來たと思はれる歌が二百七八十首はあらう。それは九州土人の作つたものばかりではない、大部分は都人士のものではあるが、其の内には地方人の口に成つた民謡的地方歌、遊行女婦の歌、白水郎の歌等のあることは注意すべきである。かくて日本最初の純文學たる一大歌集の中に、九州は都人士をして

多分に歌はせたのみならず、郷土人も亦彼等と肩を比べ、可なり著しさを以て跡づけてゐるのである。

さて文學に關聯して考へたいことは、文學を記す文字の使用についてである。我が國の文字の書始めは無論漢字であつて、其の漢字が何時頃から用ゐられたかは不明であるが、其の漢字の日本に残つてゐる最も古いものを九州が持つてゐることは亦我々の注意してよい事實である。それは言ふまでもなく、天明四年志賀島から發掘された漢委奴國王の印である。歴史家の考證によれば、之は後漢光武帝の中元二年（西紀五十七年）に彼より送つたものであつて、漢學傳來の年だと言はれる應神十六年より二百三十年も前の事に屬する。之は無論支那から貰つたものではあるが、かうした事が自然早く九州地方に文字使用の行はれたことを暗示するものではなからうか。古い金石文に於ても（我が金石文は推古朝に始まるが）九州は相當古いものを持つてゐる。京都の妙心寺法金剛院の鐘は、徒然草に黃鐘調であると言つて出てゐるものであるが、其の鐘の銘は

戊戌年四月十三日壬寅收糟屋評造春米連廣國鑄鐘とあつて、戊戌は文武天皇二年である。糟屋評（評は那の義）は我が筑前國の郡名であつて、少くも我が九州人の手にかゝつてゐることは想像して差支なからう。更に古文書に於ては我が國最古のものは文武天皇大寶二年（妙心寺の鐘より四年後）の戸籍帳であつて、奈良の正倉院に残つてゐる。其の内に御野（美濃）國のものと共、筑前國島郡川邊里の戸籍と、豊前豊後兩國の一部のもの存することは郷土人の知つてゐてよい事である。此等は小さい事のやうではあるが、早い時代の文字使用の事に關係してゐるから、廣く文學的に九州を色づけるに、尠からず役立つものである事を感じる。

二

以上は主として國文學に關する方面であるが、轉じて漢文學に就いて一顧を拂はう。漢文學に就いては、奈良朝に於ける太宰府の學業院の事、吉備眞備の事や、平安朝に於ける菅原道眞の事などよりも、ずつと下つた戰國時代に於ける九州の朱子學がむしろ注意を値ひするやう

に思ふ。應仁の亂一たび起つてより、京都は修羅の巷と化し、兵塵百年、世は慘澹たる戦雲に掩はれたけれども、猶文學の方面に於ては一條の光明を保つたものがある。それは言ふまでもなく五山の名僧が依然として文事に携つたのみならず、地方の大名の間に文學の興隆に力めたものあつたことである。特に注意すべきはそれら大名が學藝を勧めた爲に、それがやがて徳川時代に於ける文學興隆の種子となつたことである。就中關東に於ける上杉憲實の足利學校を再興したるに對して、西方に於ては中國に大内氏があり、義隆が殊に文學を好み學士を招聘して經書を講ぜしめ、書籍を出版せしめた。尙土佐に於ては名儒南村梅軒が出て大いに儒學を唱へ門下を養成した。この際九州に在つては肥後の菊池氏と薩摩の島津氏とがある。文明八年周防山口の僧桂庵（南禪寺惟肖に學び、長ずるに及びて程朱の學に志し、應永年中入明、居ること七年にして歸つた）は菊池氏の招に應じて、肥後に在つて、其の釋龔に參じたが、當時國內の僧徒詩人は皆參集した。薩摩の漢學は島津氏十一世の忠昌とこの桂庵とに

よつて起つた。忠昌が桂庵の碩德博學なるを聞き、人を肥後に遣し禮を厚くして之を聘し、大いに之を優遇した。文明十三年には遂に大學章句を刊行したが、之を文明板大學又は伊地知本大學（國老伊地知重貞が桂庵に謀つて刊行したので）といつて、本邦で朱子新註刊行の嚆矢である。當時桂庵に師事したのは忠昌を始め島津一族及び國老があり、薩都新興仲尼之道、移東魯之風と言はれた薩摩の文學の隆盛は想ふべきである。次いで薩摩の族藩日向飢肥に寺を建てて桂庵を居らしめたから、ここにも儒學は起つて來た。かくて桂庵は永正二年に寂したが、其の學は同國牛山の月渚、同じく大迫の人一翁を経て、日向南外浦の人文之が相傳へて、日薩の儒學は蓋し戰國時代に重きをなした。

徳川時代に入つて儒學が勃興し、殊に朱子學の唱道が藤原惺窩に起り、林道春に傳へて隆盛を見たことは世の周知する所である。然るにこの惺窩の學は何處から傳つたのかといふと、我が九州より齎らされたものに他ならない。前述の文之が坊ノ津の正龍寺に居た頃、惺窩は世

に良師なきを患へ、文祿二年奮然海を渡つて支那に赴かうとしたが、暴風にあつて鬼界ヶ島に漂着し、次いで坊ノ津に寄港した處、そこに文之のあることを聞いて正龍寺を訪ひ桂庵の「一家法和點」及び文之の「四書新註和訓」を寫し、兼ねて鹿兒島では島津日新齋の遺書を得て京都に還つた。時恰も文之は他に在つて相見ることを得なかつたが、全く桂庵を祖とせる日薩の儒學を其の儘京都へ輸して行つたものである。世には惺窩を知つて日薩の儒學を知らないものが多いが、戰國末の九州の儒學が、徳川時代に京都に入つて榮えたと見ることが出来る。かく我が九州は日本に於ける朱子學の起源に於て甚だ重要なものをなしてゐると言はなくてはならない。

儒學の隆盛に關して注意したいことは印刷術の事であつて、已述の如く我が九州には所謂文明の薩摩板を有してゐて、朱子新註刊行の創始をなしたのであるが、薩摩の書物開版は已にそれ以前に在りと言はれるほど、此の國の印刷事業は早く開かれてゐた。さて伊地知本が大いに世に行はれたから、其の風が隣國の日向・大隅等にも及

んで南九州には續々漢籍刊行の擧があつた。かくて薩摩板は其の頃の地方版として、山口の大内版と共に我が印刷史上、古くかつ重い位置を占めてゐることを知るべきである。尙九州の印刷については、世に博多版といふ名稱があつて、元人兪良甫が應安の頃日本に來て刊行した漢籍をそれだと言ふのであるが、之に就いては確かな記録もなければ、亦博多で刊行したことを明示する書物も残つてゐず、甚だ不明のことに屬してゐるが、漢學輸入の爲、我が九州が重要な位置に在つたことの天下に認められてゐた一つの表れと言つてよいであらう。

三

次に西洋文學の輸入に於て、我が九州の地が魁をしたことは勿論である。西洋文學の輸入は所謂南蠻文學キリシタン文學であつて、基督教と共に這入つて來た。フランススコ、サビエールが天文十八年に薩摩に來て布教し始めてから、我が九州の大名で之に歸依するものが多く、中央では信長も之を許可して保護を加へたほどで、九州の大友・有馬・大村の諸侯の如きは、遂に天正十年

に使を羅馬法王に送るに至つた。之が例の十二歳の少年伊東萬千代を中心とした使節一行であつて、抑々我が國人の歐洲に往つた嚆矢である。かうした處にも我が九州人が先づ其の魁をなしてゐるのである。

さて彼等布教者たちは、教學書は勿論、日本語學習の爲の語學書又は文學書の出版をなした。即ち當時の長崎・天草・加津佐等に於て、盛に羅典・葡語の如き外國語若しくは日本語を以て、ローマ字若しくは日本文字に由つて、それら幾多の書物を刊行した。當時のもので今現に遺存するものでも二十數種に餘るほどである。其の内こゝに殊に注意すべきは文學關係の書類であるが、文祿の平家物語及び伊曾保物語、慶長の太平記拔書等である。其の内殊に伊曾保物語が翻譯文學の先驅をなしてゐることとは注意すべきことである。平家物語も當時の口語に譯したものであつて、從來未だ嘗てなかつたものである。又語學書・教學書の中にも、彼の國の希臘・羅典の古典書からの斷片が載つてゐる。即ち希臘ではホーマー・プラトーン・アリストートル・ヘロドタス・ゼノフォン等、

羅典ではヴァージルの語句、シセロ・セネカ・ホレース等であつて、シセロの其の演説集の如きは、羅典原文のものが日本に於て刊行された筈のが、本は亡びて残らなかつたといふ話である。以て當時西洋文學の輸入された一斑を窺ふことが出來よう。足利時代末の小説「天狗の内裏」がヴァージルのイーニートから出てゐ、百合若大臣の傳説がホーマーのユリシーズより翻せられたものである事が認められるならば、是等もたしかに九州から這入つた吉利支丹文學に起源してゐるものと見なければならぬ。

この外に語學書ロドリゲスの日本文典に引用された文例に、當時日本に出來た物語類の斷片があつて、其の書名などの知られたものも十二三種に上つてゐる。これらは皆宗教關係のものであつて、純文學のものとは言はれないだらうが、内の黒船物語・豊後物語・加津佐物語などいふものは、其の題名から推して恐らく我が九州で出來たものだらうと、強く想像させるものである。安土桃山時代は我が文學史上に於て最も寂寥を感じる時であ

るが、この際に當つて我が西陲に於て、かゝる外國の文學若しくは外國影響の文學の花咲いたことは、已に異觀であるのみならず、ともかく外國思想外國文學輸入の先驅として、九州人は誇としてよいと思ふ。況や其の或物は永く我が文學に外國種の影響として残つてゐるに於てをやである。

茲に注意すべきは、外國文學輸入と共に新印刷術の傳來である。之は古代文學と文字、近古漢文學と開板といふ事と共に、是非吾人の一顧すべきことでなくてはならない。日本に活字版の術のあるのは、高麗から輸入されたのに起源するのであるが、それは文祿二年に始められたらしい。然るに西洋式活字印刷術の傳來は彼の耶蘇教徒によつて、それより三年前にあり、天正十九年には肥前の加津佐で吉利支丹版の最古の書たる「サントスの御作業」が刷られてゐる。之は其の前年ワリニヤーニがゴアから、前述の九州三大名の羅馬使節の歸朝を送つて再來した時、この活字機械一臺と職工若干名を載せて來たのであつた。かうしたことは九州が必ずしも私すべきものでもなからうが、とにかく西肥に於て西洋新式の印刷

機械でもつて、西洋文學の書、日本文學の書が刊行され始め、かつ可なり長く續刊された事は、日薩の漢書開板と共に、我等九州人の快味を覺えるものでなくてはならない。

四

以上述べ來つたことは、要するに我が九州は日本に於ける自國文學に於ても、漢文學に於ても、はた西洋文學に於ても皆或意味に於ての起源をなし先驅をなしてゐるといふことになる。

福岡藩の儒者龜井南冥は都督府即ち太宰府の遺址の碑に次のやうなことを言つてゐる。

昔郡縣爲治、本藩太宰府與奧鎮守府、對峙東西、布政牧民、且備外寇、制甚綦重、但以太宰府兼統百濟唐山渤海等聘、文武具官、冊命親王主帥之、非如奧專用武、即以權帥大貳來莅、若黃備大江二公、其最著稱矣、若乃菅公以右大臣左遷權帥、蓋異數……。

即ち武と共に文の國であることを強調して誇つてゐる。正に國學者中島廣足と好一對であると言ふべきである。

(以上は去九月二十日開催の九大國文學會講演會で試みた小話の梗概である。)